

和田英道先生を偲んで

神野藤 昭 夫

もう一昨年のことになってしまった。

国文学科で恒例となっているゼミ旅行に、和田先生のゼミと日程をあわせて出かけた。十一月三十日から十二月三日にかけてのことである。日程をあわせたのは、先生の体調不良の場合には、僕が面倒をみようという前々からの約束からだだったが、先生はさっさとお気に入りの宿を決めてしまわれた。既に、利尿を促進するための点滴を、毎週のように行わないと、腹水がたまつて、明らかに顔色がすぐれなくなる状態になつておられたから、宿が違つても僕が引率するからとかなり強い調子で申し出たが、こういうときの和田先生は、頑としてきかない。僕に任せることで、ご自分のゼミの学生にさびしい思いをさせたくないという心遣いであるにちがひなかった。律子夫人を帯同され、先生にかわつて、夫人が学生たちと計画どおりのコースを歩かれた。最終日であつたか、先生は、学生たちを嵯峨野の寂庵に連れてゆかれた。先生の学長時代に瀬戸内寂聴氏を講演にお招きしたのが縁で、お出かけになられたものらしい。それが、宿で休んでおられることの多かつた先生の、ゼミの学生たちへの贅沢な心配りなのだった。

二日目は、寒い日であつた。冬でもめつたに来ないというマイナス四〇度という寒波が襲来して、雪にな

る確率が高いらしい。その日、僕のゼミでは鞍馬から貴船へ抜ける予定だったが、急遽、予定を変更して、小野小町に贈られた艶書を貼って造ったという玉章地藏のある退耕庵に立ち寄ってから、東福寺に出かけた。もちろん紅葉の盛りは過ぎていたが、まだ散りきってはいず、学生たちは堪能して、盛んに写真を取りあつた。そこから泉涌寺にまわつて、定子陵に詣つた。寒風が強く吹きつけ、風に折れた枯れ木が散乱している。朝の予報とはちがつて雲ひとつない青空。参るひともいない森閑とした静けさのなかで、ひとしきり若くして逝つた定子の生涯を話して、『栄花物語』にみえる一条天皇の哀傷歌「野辺までにごころばかりは通へどもわが行幸とも知らずやあるらん」を紹介したりした。凍えるほどの寒さにたまらず、遅い昼食後は、京都文化博物館に逃げ込んだが、幸い折から開催中の《京都・激動の中世》展を楽しんで、夕方からは自由解散にした。

こちらは、六時過ぎに、四条通りと富小路の交差点を北へ上がつて、すぐ右手にあるポントンという古い洋食屋で、和田先生夫妻と食事をもにした。和田夫妻は二十年來のご最良なのだという。〈洋食〉という言葉にハイカラな懐れが生きていたころの、懐かしい味を思い出させてくれる落ち着いた店である。そこで、先生は、一度このオムライスが食べてみたのだとおっしゃつて、おいしそうに召し上がつて、少し残された。平安後期文学の研究者である律子夫人とは、論文を介して、僕が跡見に赴任するまえからの知り合いであつたから、懐旧談に華が咲いた。愉しいひとときであつた。

外に出ると小雪が舞っている。和田夫妻は再び車上のひととなり、宿に戻つて行かれた。ホテルに戻ると、たちまちに雪が積もり出している。外を眺めながら、こういう時間はもう二度と来ないのではないかと、心の沈むのをいかにともできずにいた。

先生が、胸部に痛みを訴えて、緊急入院されたのは、京都の旅から戻られて一週間と立たない十二月八日のことであつた。肺にたまった水を抜いて元氣を回復してか、二日後には電話をくださった。しかし、翌日から原因不明の熱が出て、十三日には大学から帰宅すると、和田夫人から容態悪化の連絡があつて、前危篤状態であるというメモ書きがある。さつそく電話して長男の琢磨君から様子を聞く。意識不明という。胃からの出血が原因で、毒素が脳にまわっているらしい。胃部からの出血は牛乳ピン八本分に及んだという。そんな一部始終を、彼は落ち着いて話してくれた。

意識が戻るかどうかは、ここ一週間が山との話だったが、奇跡的に意識が戻つたのは、十五日のことだつた。医師の予測に反する明晰さで意識を取り戻した先生は、今日は卒業論文の締切日だが、とつぶやいたという。

この間、学科では、回復が長引くことを案じて、学生たちに対する対応策を講じた。その報告がてら、先生を見舞つたのは十八日のことだつた。国文学科の皆さんにはすっかりお世話になつて、深く感謝していますと言つて、先生は合掌された。病室の天井を見上げたまま、今度ばかりは天命にまかせる心境ですとも語られた。僕も、ここぞとばかり、もう自分をたいせつにすることだけを考えなさいと、それまで言い続けて来たことを繰り返した。その日ばかりは、先生はすなおに頷かれた。

先生は、大学二年のときに母上と死に別れておられる。その前後に肝臓を患つて入院されたことがあるものの、その後は、健康を回復されて、宿痾の病を抱えた身であるという自覚もないまま、時を送つてこられたらしい。

跡見では、僕より先任であつたが、軟式野球部を設立して顧問として熱心に指導された。職員員の野球のク

ラブにも入って、試合となると、投打に活躍した話をよく耳にした。わけへだてないその性格は、職員からも絶大な人気があった。先生は、たんに跡見の学生たちの野球を指導するだけではなく、率先して全国大学女子野球連盟の設立に尽力されて、後には同連盟の理事長を務められた。

それがいつのことだったかは忘れたが、じつは激しい運動をしてはいけない病の身であることを医師に告げられたらしい。その時点で既に、養生して、ゆるゆると無理をせずに生きるべき健康状態であったのである。だが、大学の運営に明るく、すぐれた見識と行政手腕の持ち主でもあった彼を、状況が放っておかなかった。何よりわが身を省みない熊本男兒らしい気概と頑としてきかない意志強固なところがあって、学長を引き受けたときも、既にして命とひきかえになるかもしれないことを覚悟していたとおほしい。だから、やることは果断であったし、性急でもあった。その視野の広い豊かな識見にもとづいて諸問題を早く解決しようと、獅子奮迅の努力を惜しまなかった。懸案だった海外研修も、みずからアメリカやイギリスに渡り、実現にこぎつけた。彼にこわいものがなかったのは、死を常に意識し覚悟していたからであると、今にして思う。彼にこわいものは、道半ばにして、みずからの健康のために減速を余儀なくされることだ。

しかし、恐れていた事態は、任期の後半にやってきた。彼が実現しようとしていた課題の正念場で、彼にドクターストップがかかったのである。かつて学長を務めた山崎一穎先生に一時期学長事務の代行をお願いし、出校日も減らして、任期を務めあげたのである。どんなに無念なことであったか。彼が企画し、実現するかに思われた青写真のいくつかは、じゅうぶんな意図の伝わらないまま、放置されるほかなかった。

それでも、自分の学長時代に正式調印にいたらなかったロンドン大学ホロウエイ校との留学制度の調印のため、今度は国際交流委員長として、渡欧した。平成七年三月のことである。学長時代に培った権限が、そ

れを実現したのではあったが、僕などのあずかり知らないところで、夫人を同伴して旅立たれた。夫人を伴われなければあぶない旅だったのである。事は無事修了したが、病状はいっきよに悪化した。

平成七年の春が来て、大学に姿を見せたものの、長く講義の続けられる状態ではなかった。僕は、一年間の休養を勧めた。さすがに折れて、病を養う身となったが、すっかり回復するという性格の病気ではなかったが、安静に日常を送ってさえいけば、よくはないなりに病状を維持することができたのである。僕が青葉台のお宅に訪ねたときも、悪いときを知る身からすると、ずいぶんと元氣そうにみえた。しかし、気を許してはいけないと釘をさしたのだが、氣儘に馴染みの骨董屋に出かけたりして、まじめな病人ばかりではいなかっらしい。だが、死の床にあつて書きついでおられた『三宝絵』の古筆の新資料の発見と紹介なども、氣随のようになみた所業が可能にした学問への執念の賜物でもあつたのである。病床にあつて、必ずしも意に満たなかつたにちがいない原稿を完成させてくださったのは、小島孝之東大教授のご助力による。本誌掲載の遺稿がそれである。故人もさぞかし喜んでおられることと思う。

昨年ゼミ旅行も十二月の初めになった。三年のゼミ生は、前年に果たせなかつた四年生に代わつて、再び一日、鞍馬から貴船へ抜け出る予定を組んだ。しかし、昨年、前夜からの雪で断念せざるをえなかつた。あたかも一昨年の旅の再現のようであつた。

ゼミ旅行の最終日。半日の日程をこなしたところで、新幹線の時間まで解散した。僕はひとり、和田先生夫妻と一夕をともしたボントンに出かけた。和田先生がおいしそうに召し上がったオムライスを食べようと思つたのである。しかし、店は閉まつていた。既に二時をまわつていたので、休憩時間にもなつていたのであろうか。だが、休憩とも休日とも札が出てゐるわけではなかつた。人氣の感じられない気配に店じまい

したのではあるまいがと思いつつ、とぼとぼとその場を離れるほかなかつた。

〔追記〕 全国大学女子野球連盟では、先生のご功績をたたえて、一九九七年の大会から和田賞を設けたと聞く。ファインプレーを対象とした賞であるという。和田先生の御名は、跡見の外の世界でも、多くの人々の記憶に長くとどめられることになった。さびしくも嬉しい話である。